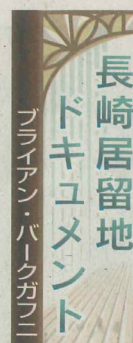


複雑な出自 グラバー家に縁



20

倉場ワカをしのぶ



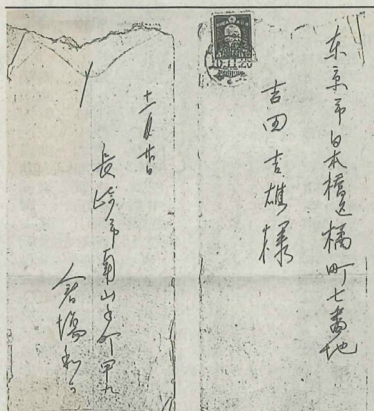
トマス・グラバー(中央)と倉場富三郎夫妻。明治末期、グラバー邸下の庭園にて(カラー加工)(筆者蔵)

明治初期に来日したイギリス人ジエームズ・ウォルターは、生糸貿易に従事しながら横浜外国人居留地のビジネスリーダーとして頭角を現した。「ワタさん」と呼ばれて親しまれるほど、日本人の友人も多かったという。

当時、ウォルターは中野エイという日本人女性と交際していた。2人の間には、息子と2人の娘がいたが、正式な結婚はしていない。明治20（1887）年2月、ウォルターはアメリカ人女性ハリエット・ウインと横浜の教会で結婚して新しい家庭を築いた。

中野エイと子供たちにとどのように対応したかは不明だが、当時12歳だった次女

日本人のアイデンティティー



倉場ワカは、太平洋戦争開戦直前の昭和16（1941）年11月、東京に住むいとこへ手紙を送った。封筒に自分の名前を「和力」で表記している（高山朋子氏提供）

のワカについては、名門の東洋英和女学校に入学できるよう手配し、友人のトーマス・グラバーに世話を頼んだ。その後、ワカは東京芝公園にあったグラバーの屋敷から学校に通っただけでなく、グラバーの内縁の妻、淡路屋ツルが戸籍を作成した際に「養女」として一家に迎え入れられた。

明治25（1892）年初めに芝公園の邸宅が火事で焼失した後、17歳のワカはグラバー夫妻とともに長崎へ移り住んだ。実父のジェームズ・ウォルターは、横浜の外国人コミュニティの著名な一員としてキャリ

アを積みながらハリエット・ウィンとの間に一男一女をもうけたが、明治42（1909）年に亡くなるまで娘ワカと交流があったかどうかは定かではない。

明治32（1899）年6月、ワカはトーマス・グラバーと加賀マキの間で生まれ、戸籍上では同じく淡路屋ツルの養子になっていた倉場富三郎と結婚する。

英語と日本語を流ちょうに話す富三郎は、長崎内外倶楽部の設立に努めるなど、日本人と外国人の橋渡し役として長崎のビジネス界と社交界で活躍した。また、幹部社員としてホーム・リ



上野彦馬のスタジオで撮影された
若き日のワカ。明治28（1895）年
ごろ（筆者蔵）

ンガー商会の拡大と多角化に寄与し、世紀末前後の長崎の好景気に貢献した。ワ力は陰から夫を支え、明治42年に入居した南山手3番地のグラバー邸で静かに暮らした。富三郎は常に洋装であったが、ワ力は和服姿で髪を結い上げ、日本の伝統的なスタイルで家族写真に写っている。2人とも日本国籍のみを保持し、日本人としてのアイデンティティーには揺らぎがなかった。子供には恵まれなかったものの、複雑な生い立ちを共有する2人は、適切に接することのない絆で結ばれていた。

昭和12（1937）年に日中戦争が勃発した後も、富三郎はさまざまな社交団体に参加し続け、ワ力は愛国婦人会などに入会してボランティア活動に加わった。しかし、国際理解のための努力にもかかわらず、2人は憲兵隊から疑いの目を向けられ、戦艦武蔵の建造中に南山手の邸宅を三菱に売却することになった。太平洋戦争中の昭和18（1943）年、ワ力は結核を患って引越した先の南山手9番地でこの世を去った。享年68。終戦直後、富三郎は自らの命を断ち、長崎とグラバー家の関係が悲劇的な結末を遂げるのであった。

(グラバー園名誉園長)

月1回掲載します